

## 俳句の中の夢（四）

池田亮二

いつ迄も夢は覚るな霜の舟

屠龍

屠龍は、絵師として有名な酒井抱一です。舟遊びで三保の松原辺りを廻って絶景に感嘆し、「この夢よいつまでも覚めるな」と思ったのです。つまり、夢を見ているのではなく現実を夢とみなしている。その夢よ覚めるなどは、子どもが遊び呆けていていつまでも家に帰りたくないという心情。酒井家という大名の家に生まれながら、次男坊の気楽さで若い頃から遊廓に遊び、浮世絵を描き、俳句、狂歌など好き放題のことをして過しています。庶民から見れば夢のような極楽世界にいながら、それでもうんざりするつまらぬ俗事も色々あったのかも知れません。

星今宵夢みてはらむ人あらむ

暁臺

性行為にかかわる句を初めて見つけてびっくり。嬉しくなりました。季題は七夕とあるから、彦星と織姫の年に一度の逢瀬をふまえていることはわかります。わからないのは、夢見る女が孕む相手は人か神か。交わりもなく孕むか。ててなし子を孕んだか。処女懐胎か。孕んだ夢を見ただけなのか。そもそもこの句はめでたい句なのか。けしからん句なのか。

暁臺は、元尾張徳川の家臣、若くして脱藩し、俳人として大立者となり、蕉門復興の一翼をも担った人。そんな大家もこういう色っぽい句をつくって、わしじやって遊び心はあるけんとなやなやしてのさまが浮かびます。

にこ / \ と生死(しょうじ)涅槃の夢覚て

支考

こういうのを吉夢というのでしょうか。生死涅槃とは迷いから覚め、人生の悟りを得て、苦界から脱すること。仏教の理想の境地をいうそうです。支考の人生の悩みが何であったか知らないけれど、たとえ夢でも、それからきっぱり脱したというから、嬉しい限りの目覚めで、無邪気にニコニコ喜んでいる。

ここまで述べた俳人の多くは、晩年出家遁世しているのに対し、支考さんは逆に、はじめ出家していたのが還俗して孔子、老子の門に入り、芭蕉に出会って俳諧の風流、風狂に惹かれてのめりこんだということです。そういう俗気がある人に、また生死涅槃などと仏教の言葉が出てくるのが、何となくおかしい。支考は俳諧の風狂の言葉は「虚にいて実をいう…つまりは上手にウソをつくこと」と書いているから（『風俗文選』）、ホントに悟りを得たのかどうかもわかりません。悟りを開いた夢を見たが、覚めたらすっかり忘れてしまったのかもしれない。

夏草や兵どもが夢の跡

芭蕉

奥州平泉で芭蕉が見たのは、ただ一面の夏草ばかりで、崩れた城郭でもなく甲冑も錆びた刀槍も白骨も散らばっていません。その中で彼は、すさまじい合戦の声を聞き、藤原三代の栄華と義経主従の滅亡の夢を共有したのでしょうか。芭蕉の白昼夢と兵たちの夢が二重写しになっている。やはりすごい句です。

旅に病て夢は枯野を駈廻る

芭蕉

これはあまりに有名な句なので、おこがましいコメントは控えます。ただ、芭蕉懐旧の句として同時代の俳人の一句を見つけたので添えておきます。

かけまはる夢は焼野の風の音

鬼貫